③先人の教え

賞与に関して

平成３１年３月２７日

「賞与と言っても生活給。だから年間２カ月分は保障すべき」という見方が昔からあるが、その生活給という考え方は捨てて、利益還元金ととらえなおす時代になったのではないか。「生活給」的な支給をしている時代ではない。利益を稼ぎ出す人財を高く評価する「利益還元金」に考え方を改めず、「赤字経営だから全員一切賞与はなし」としていたら、人財が流出してしまう。

ジンザイという漢字はふつう「人材」と書くものだが、社内には以下のようにいろいろな**ジンザイ**がいる。

人財（会社の宝）
人材（一応、戦力になっている）
人在（いるだけの人で、いなくなっても困らない）
人罪（いるだけで周囲に迷惑をかける人）

会社にとり、最も怖いことは人財を失うことだ。募集したところで人財は採用しにくいし、育てるにしても時間がかかる。悪平等主義では人財を失ってしまう。
利益還元金なのだから、貢献度を評価して配るのであり、「やったら、やった分だけのことはある仕組み」にするべきだ。そこには「生活給」という言葉はない。もっとほしければ稼げばよいのである。

故会長　石田　敏久

今までは会社から、なんの拘りもなく当たり前のように賞与を頂いていました。しかし、
いま賞与は勝ち取るものだと感じています。そのために利益を上げ目標を追いかけ、充実して日々を送らなければいけません。その結果が賞与であると考えます。